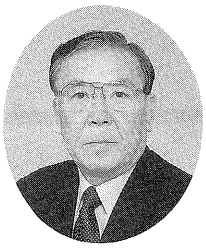

巻頭言

一葉に学ぶ

(財)日本植物調節剤研究協会　理事
クミアイ化学工業株式会社専務取締役　石原英助

新５千円紙幣の顔となる樋口一葉が話題になっている。そのブームに刺激された訳ではないが，久しぶりに数編の作品を読み返してみた。僅か百年前の，しかも若き女性の文章の難解さと，奥深さに触れ，明治の世を短く駆け抜けて逝った一葉に改めて肝銘を受けた。その一葉を話題にしていたところ，親切な方が一葉記念館のホームページとその場所を示す地図を準備して下さった。そのお陰で，春の一日，その記念館を訪ね，一葉の直筆の原稿や日記や遺品の数々などに身近に浸ることができた。そして，再度，一葉の生きざま，執念，信念を打ち込んだ文学への取り組みに衝撃を受けた。

見学が終わって外に出た。館の前の小さな公園の緑が鮮やかであった。この緑を守り育て，また食糧の安定供給に役立った仕事に取り組んできた自分の生き方を改めて思考する機会となった。

貧困と借金の生活苦の中で執筆活動に打ち込んだ一葉と現在の我国でのグルメ料理と飽食を満喫しているこの現状をみたとき，単に豊かさだけで説明できるのだろうか。

我国の食糧自給率はおおよそ40％である。これは先進国の中では極端に低く，国民的な論議にすらのぼっていない。

一方，世界に目を向けてみると，世界の人口は伸び続けており，現在は63億人と言われており，このまま伸び続けると今世紀末には100億人を越すものと推定されている。この様に増えつづける人口に対し，限られた耕地で食糧を安定的に供給することが最大の課題である。このことに関しては，1798年にロバート・マルサスが「人口の原理」の中で，人口は幾何級数的に増大していくのに食糧は算術級数的にしか増加しない，いずれ人口に対して食糧は不足していくだろうと記している。まさに現状はこの予測の通りとなってきている。この解決策としては，農業生産性を向上させるしか方法がない。すなわち品種の改良，栽培技術，農薬や肥料など関連の技術の進歩・発達が強く求められている。この様に科学技術の進歩とともに最も重要なのは，農業にロマンと自信をもつ人材の育成である。我国の自給率を40％からわずか５％向上させるのに10年かかると計画されている。これほど食糧生産，すなわち農業の改善・改革は困難を伴うものである。

近年，農という文字が教育，行政，政治，経済などの面から軽んぜられ消滅しようとしている。農のイメージはこれほど忌み嫌われているのであろうか。悲しいことである。農業にロマンと自信を取り戻すためには，何よりも全国民の支援と理解が必要ではなかろうか。

このところ，家畜や水産動物に異常な病気が発生している。これらは農を軽んじている風潮に対する警鐘ではないかと思われなくもない。農業に関連する技術の開発や基礎研究に夢を抱き，情熱を燃やす若き人材と，農業に信念と理念をもって取り組む若きエネルギーが最も必要ではないだろうか。

一葉は24歳で最期を迎える僅か１年でほとんどの作品を執筆している。その情熱の凄まじさを感じた。自分自身，農業，食糧，農薬を語ってはいるが，嘆き節で解説のみではないか，自戒の念にかられた。

一葉記念館の帰路，上野公園に立ち寄った。桜が満開で多くの人で賑わっていた。賑やかで，平和で，豊かさがそこにあった。おそらく，今後，お札に登場する一葉もこの辺りを散策したのであろう。今のこの日本をどう思い，どう見ているのであろうか。　以上